

モーハン・ラーケーシュの児童文学

田 中 敏 雄

インド・パキスタン分離独立後、ヒンディー文学の世界に登場したモーハン・ラーケーシュ¹⁾は、50年代から60年代にかけて、新しい短編小説運動のスポークスマンとして発言し²⁾、ヒンディー演劇運動に指導的役割を果たした³⁾。そのラーケーシュに4編の童話があることはあまり知られていない。ここでは、4編の完成作品について、児童文学の立場⁴⁾からではなく、ラーケーシュの人と生涯を解く手掛りとして考えることとしたい。

ラーケーシュの童話に読者が初めて接したのは、逝去の翌年、雑誌『サーリカー』が特集した『モーハン・ラーケーシュ追悼記念号』であった。「金色の鶏と黒い猿と赤い実をつけるアムルードの木」⁵⁾という337語よりなる短いもので、原作の要約か複数ある草稿のうち短いものが収録されたのか、いずれかであろう。翌年、二周忌に4編を収めた童話集⁶⁾が刊行された。

「刺の生えた男」⁷⁾は平凡な公務員。ある日、右の掌に刺が生える。数日後、左の掌にも。治療に手を尽くすが刺を除くことはできない。数日すると今度は額にも。ある夜、夢に2人の男が現れる。容姿は同じなのに、一方には刺が生えていて他方にはない。刺のない男は相手に、刺が生える前にチクチクしただろう、原因は分っているはずだ、といって姿を消す。目が覚めると、刺が生える数日前からチクチクしていたことを思い出す。右手で賄賂を受け取ったのだ。上司が尋問すると、半額を左手で渡した。額のはどうしても思い出せない。数日後、ある大物から食事に招かれる。同僚たちは羨む。迎いの車の運転手が主人の用件を伝える。秘密書類を持ち出すことである。門に入ろうとすると、右足にチクチク。入らずに帰る。翌日、上司から叱責され、謝罪に行くようにいわれる。その時、背中にチクチク。言い訳しようとする、舌にチクチク。男は解雇される。家に帰るとトランジスタラジオが目に入る。賄賂の金で買ったものだ。両手で窓の外に叩きつける。叩きつけた瞬間、両掌の刺は取れている。その夜、夢に例の2人の男が現れる。刺が生えるのを抑えられたんだから額の刺の原因は分るはずだ、と刺のない男が語っている。

「骨と肉のない男」⁸⁾とはロボットのことである。人間の100倍の能力を持つ。

そのロボットがロボット製造器材を持って逃亡する。世界的規模で大捜査が行われるが、行方不明のまま4年が経過する。台風のため、ある島に避難した漁師がそのロボットに合う。ロボットは漁師を作業現場に案内する。ロボット群が木を伐り、炭を焼き、鉄鉱石を掘り、綿を打っている。それぞれのロボットは作業対象の物質でできている。そのロボットは、大量に製造して世界中に供給し、早魃、飢饉、寒波に直面する世界に代って新しい世界を創るのだ、と誇る。ただひたすら労働するだけのロボットの世界、家庭や子供など必要としない世界。漁師は、「あなたの世界は続かない、子供たちのいない世界、愛情のない世界は決して続かない」⁹⁾、といて逃げだす。海岸に着いて振り向くと、そのロボットはロボット群に火を放っている。

「金色の鶏と黒い猿と赤い実をつけるアムルドの木」¹⁰⁾は友情で結ばれた三者が協力して人間たちから自分たちを守る話である。鶏を守るために木は熟したアムルドを落とす。捕鳥人が芳香に夢中になって食べだすと、猿は硬い実を投げつけて気絶させる。捕鳥具や袋を奪い、鶏を背にして猿は木に登る。猿を守るために鶏は羽根を広げ土埃を立てて走り回る。捕獲人は目を開けることも息をすることもできない。木は猿を隠し、熟しすぎた実を落とす。捕獲人が足を滑らせると、鶏は網を奪って木の上に。木を守るために猿は大奮闘して傍に寄せつけない。鶏は実に嘴を入れて死んだふりをする。人々は怯えて立ち去ってしまう。ある日、大雨と雹が降る。実はすっかり落ちてしまう。なにもしないで寒さに震えている鶏と猿に木は怒る。木は根を張っているから大丈夫、鶏は飛べるからよい、と猿は怒る。木と猿は昔から仲間だから、と鶏は怒る。雨が止んでも、互いに口もきこうとはしない。まず鶏が捕えられ、続いて猿が捕獲され、とうとう木も伐り倒される。これを見ていたリスが呟く。「やつも籠の薪になってしまうのか。えらそうに、親友ぶっていたのに」¹¹⁾。

「カメレオンの夢」¹²⁾は不眠症に悩む変身願望のカメレオンの話である。仲間が教えてくれた葉を食べると眠くなる。いつも羨ましいと思っていた蛇に変身している。マングースに襲われると、マングースになりたいと思いマングースに、元気に跳ねていると茂みにはまり、上に伸びている木の枝を見ると、それになりたいと思い木の枝に、カラスがきて嘴で突つきだすと、カラスになりたいと思う。カラスになって飛んでいると子供たちに石を投げられる。カメレオンになりたいと思ったとき、目が覚める。

4編は友人宅で子供たちに語ったものである。親友であるラーダークリシュン

出版社主オームプラカーシュ氏¹³⁾の要望で執筆したのであろう。ラーケーシュは「完成作品」と認めず、原稿は渡さなかったようである。それぞれの作品には複数のタイプ草稿があり、『サーリカー』の編集者が「金色の鶏と黒い猿と赤い実をつけるアムルドの木」の複数のタイプ草稿から最も短いものを選択したのか、最も新しい草稿を要約したのか、いずれかであろう。ラーダークリシュン版との違いは、リスの眩きがないことである。この話で、強調されているのは友情である。「刺の生えた男」では平凡な日常と非妥協としてよい。たまたま賄賂が扱われているが、平凡な男でも譲れないものがある。額の刺はなにを意味するのであろうか。「骨と肉のない男」では、家庭と子供と愛情が、「カメレオンの夢」では日常性がそれぞれ強調されている。非妥協、平凡な日常、子供と愛情のある家、友情について、ラーケーシュの生涯から見ることにする。

ラーケーシュは紀行『最後の岩まで』でこう記している。「……と、ある家のベランダで子供たちが遊んでいる。そのすぐ傍で、女が搗鉢で米を砕いている。若者が両足を投げだして坐わり、新聞を読んでいる。その家だけの午後のひとつき。私は少年時代を過ごした家を思い出した。あの家だけの朝、あの家だけの午後、あの家だけの夕方。朝、通学前の騒ぎ。午後、ステンドグラスの明かり取りが通すもの悲しい光。夕方、訪れる客のない客間。あの朝、午後、夕方は私たちの家の文化であった……」¹⁴⁾最後の岩、つまり、カンニャークマーリー岬まで西海岸を旅行したのは1952年12月から翌2月にかけてであった。パンジャープの「人口稠密な町の狭い路地にある家で生れた」ラーケーシュは、「海への憧れ」を語り「彷徨への衝動」について述べているが、引用文が語るように、この旅はたんなる彷徨や観光旅行ではなく、人々との触れ合いを求めるものであったようである。行く先々で無名の人々の日常の営みに接し、人々との出合いを大切に共感を寄せている。では、生涯、ラーケーシュはなにを大切に共感を寄せ、なにを失ったのであろうか。

ラーケーシュはアムリットサルで弁護士カルムチャンド・ググラニーの長男マダンとして生れている。サンスクリット語の手解きをしたのは父親だったし、あの「夕方、訪れる客のない客間」は父親を訪れる友人たちで賑わっていた¹⁵⁾。少年マダンにとって父親の存在は重く、客間の賑わいは記憶に鮮明であったろうと思われる。41年、父、逝去。マダン、16才¹⁶⁾。母、姉、マダン、弟の一家はしばらくして転居。マダンは父親とあの家を失う。苦学して地元のカレッジを終え、ラーホールへ行く。パンジャープ大学オリエンタル・カレッジでサンスクリット

文学を専攻し、修士課程修了後、特別奨学生として、2年間、ブラーフマナ文献研究に従事。当時のラーホールは北インドの文化学問の中心地。マダンは演劇活動に励み、映画シナリオ、放送劇台本執筆と多忙な日々を過ごす。英訳でヨーロッパ諸文学の作品に接し、仲間たちと熱っぽい議論を交わしたのもこのラーホールであった。

47年8月15日、インド・パーキスターン分離独立。この日をアムリットサルで迎えているが、この分離独立でラーホールはパーキスターン領となり、生涯二度と見ることはかなわなかった。「糸の切れた凧」のように職を求めてボンベイへ向かう。失業の日々を過ごすマダンは、恋人の病氣、続いて死亡通知を受け取る。活動の場を失い、故郷喪失者となった思いを恋人の死はさらに深いものにした¹⁷⁾。

やがて、ボンベイ大学エルフィンストン・カレッジにヒンディー語講師として就職し、マダン・モーハン・ラーケーシュとして新しい道を歩むようになる。2年後、強度の弱視を理由に追放されることとなる。学内政治の犠牲にされたようである。49年、ジャーランドルのダヤーナンド・アングロ・ヴェーディック・カレッジにヒンディー語講師として就職するが、半年後、ここでも辞表を出すために陥ってしまう。カレッジの教育方針に従わなかったこと、評議員選挙で教員組合からの立候補者を支持したことが理由とされているが、またまた学内政治の犠牲である。組合は声明を出しただけで、組織を挙げて支援しようとはしない。ラーケーシュにとって、職を失う以上に、同僚、組織への信頼感を失ったことのほうが大きかったように思われる¹⁸⁾。

50年末、結婚。1年足らずで別居。7年後離婚。期待し望んでいた、愛情と信頼で支えられた結婚生活ではなかったようである。その後、シムラーにあるミッション・スクールにヒンディー語教師として勤務するが、『最後の岩まで』の旅はこの時期にあたっている。53年、パンジャブ大学ヒンディー語学文学科主任教授インドルナート・マダーンの推挙で、かつて追われた、カレッジのヒンディー語学文学科主任教授に就任。在職4年半。59年、デリーに移住。60年、友人の妹と結婚。63年には離婚してアニーターと共同生活を始める。72年8月、母の逝去。弟との義絶。こう列举すると故郷喪失者ラーケーシュの生涯は、家、家族、女性関係、対人関係の喪失と回復への努力の繰り返しであったといえよう。

次に、ヒンディー文学の作家として状況への関わりを見ることとする。

分離独立は、インド進歩主義作家協会主導下の進歩主義文学運動に大きな打撃を与えた。有力指導者はパーキスターンへ去り、民族自決論、言語政策をめぐっ

て、多くの人々がインド共産党を離れ、この協会は閉鎖的なものへと変わるようになった。政治の文学支配、性急な政治主義に拮抗する形で、ペン・クラブ主催の全インド作家会議やインド文化自由会議が発言するようになった。状況の進展と共に、米、ソ二大陣営のインドに対する文化工作の一環に組み入れられてしまった。それぞれの文学運動や論争に冷戦が影を落していたのである¹⁹⁾。

独立後、ヒンディー文学の世界に登場した世代にとっては幻滅の時代。不信と憤りと、はっきり名状しがたいもやもやに苛立つ時代。それでも、旧世代の作家たちを弾劾し、拒絶と不信の中で、共感とヒューマニティーを求めて手探りを始めなければならない。ラーケーシュは、10代の後半から20年代の前半にかけて、分離独立前後の激動期を体験している。この時期に、インド亜大陸で約1200万にのぼる人たちが国境を越え、アムリットサル、ラーホールを距てる国境線の両側で行われた相互殺戮の犠牲は、50万とも100万以上ともいわれている²⁰⁾。が、生き残った人たちの記憶は拭い去られるものではない。地獄を見てしまったのである。それでも生き続けなければならない。社会変動はこれまでの文化、価値体系を衝き崩してしまっている²¹⁾。ここで生き続けることは、感受性の強い人にとってもう一つの地獄に身を置くことを意味する。ラーケーシュはここから手探りを始める。ことばや紙の上の戦士たち、聖者たちとは同調できない²²⁾。

58年、戯曲『アーシャル月のある日』²³⁾ 刊行、翌年、国立音楽演劇アカデミー賞。61年、小説『暗く閉ざされた部屋』、62年、『サーリカー』編集長、65年、国立演劇学校顧問、身辺は多忙となる。70年、ソ連作家同盟の招待に続き、翌年、インド政府より、ネルー・フェロシップが与えられた。テーマは演劇を通して「言語」と「意味」を探ること。ヨーロッパの10都市に3ヶ月滞在。帰国してからも、旅行、講演、執筆、自作の映画化、テレビ出演など多忙で過度の疲労は蓄積されていった。72年12月3日、心不全のため急逝。8月に逝去した母を追うかのようにである。72年、この年は分離独立から数えて25年目にあたっていた。

多忙な故郷喪失者にも安らぎがあった。67年、長女の誕生である。長女が3才になった頃、オームブラカーシュ氏の要望があったものと思われる。平凡な日常を大切に、子供と愛情で支えられた家²⁴⁾を守り、友情のために生き、かつ、非妥協を貫くことは困難なことである。妥協とは、ラーケーシュにとって、額を相手の足下に擦りつけ屈服することを意味する。額に刺を生やさないように、45年から約20年間に8回以上も辞表を出したのである。

4編の童話はラーケーシュとその生涯について多くを語っているのである。

- 1) Mohan Rākeś (1925-72), 本名はマダン・ググラニー (Madan Guglānī).
 作品については, Paṇḍitā, Vimlā Kumārī, *Upanyāskār Mohan Rakeś (Antral ke viśeṣ sandarbh meim)* (Jaypur, 1978); 石川恵子『モーハン・ラーケーシュ 人と作品』(1981年度東大提出修士論文); Śekhāvat, Gordhansimh, *Mohan Rakeś kākāhānī yā'ra* (Jaypur, 1982) などがある。
 生涯については, *Āine ke samne*, Dilli, Akśār Prakāśan, 1965, pp.182-201; 'Chimṭiyoin kī paṅktiyaṁ', *Pariveś*, Varāṇasī, Bhārtiy Gyānpīṭh, 1967, pp.3-22; 'Mohan Rakesh: A Self-portrait', *Anthology Mohan Rakesh*, ed. by Carlo Cappola, Delhi, Radhakrishna, 1974, pp.3-14; 'Gardiś ke din', *Sarika* (Feb., 1973), pp.20-23; Anitā Rākeś, *Chand satreṅ aur*, Dilli, Rādhākṛṣṇ Prakāśan, 1974; Kamlesvar, *Merā hamdam mera dost*, Dilli, Neśnal Pabliśing Hāus, 1975, pp.3-20; Kāliyā, Rāvindr, *Kamred Monaliza*, Ilahābād, Lokbhārtī Prakāśan, 1979 などがある。
 また、大巾に削除, 編集の上で日記も刊行されている。 *Mohan Rakes ki dāyri*, Dilli, Rajpāl, 1985.
- 2) 諸雑誌でのコラム執筆, 座談会, インタビューでの主な発言は以下のものに収録されている。 *Pariveś*, Vāraṇasī, Bhārtiy Gyānpīṭh, 1967; *Bakalam khud*, Dilli, Rājpal, 1974; 'Interview with Mohan Rakesh', *Anthology Mohan Rakesh*, ed. by Carlo Cappola, Delhi, Radhakrishna, 1974, pp.14-40; *Mohan Rakes: sahitīyik aur sanskr̥tik dr̥ṣṭi*, Dilli, Rādhākṛṣṇ Prakāśan, 1975.
- 3) 劇作家として, また, 演劇界で果たした役割, 評価については, Kathūriyā, Sundaral ed., *Nāṭakkār Mohan Rakes* (Naī Dilli, 1974); Govinī Chātak, *Ādhunik nāṭak kā masihā Mohan Rakes* (Dilli, 1975); Śarmā, Jagdiś, *Mohan Rakes ki rang sr̥ṣṭi* (Dilli, 1975); Rastogī, Girīs, *Mohan Rakes aur unke nāṭak* (Ilahābād, 1976); Bansal, Puṣpā, *Mohan Rakes ka naty sahitīy Śarmā, Tilakraj Apne nāṭkōm ke dāyre meṁ nāṭakkār Mohan Rakes* (Naī Dilli, 1976); Śarmā, Anūpmā, *Mohan Rakes ke nāṭkōm meṁ mithak aur yatharth* (Naī Dilli, 1980) などがある。
- 4) 「この時期, モーハン・ラーケーシュ……などの大家による児童文学作品が刊行されたが, 作品の重要性は大家によって書かれたということだけにとどまった」(Dev-sare, Harikr̥ṣṇ, '*Hindī bāl sahitīy: racknā aur samikṣā*' Naī Dilli, Śakun Prakāśan, 1979, p.49).
- 5) 'Sunahrā murgā, kālā bandar aur lal amrūd kā per' *Mohan Rakes smṛti ank Sarika* (Mar., 1973), p.41.
- 6) *Binā hār māms ke admī: Bāl-pāṭhōm ke lie viśeś rap se likhl gal char kahāniyaṁ*, Dilli, Rādhākṛṣṇ Prakāśan, 1974 (以下 *BHA* と略す)。
- 7) 'Kāntedār admī', *BHA*: 7-18.
- 8) 'Binā hār māms ke admī', *BHA*: 19-26.
- 9) *BHA*: 25.

- 10) 'Sunahrā murgā, kalā bandar aur lāl amrūd kā peṛ', *BHA* : 27-33.
- 11) *BHA* : 33.
- 12) 'Girgiṭ kā sapnā', *BHA* : 34-39.
- 13) Omprakāś (1915-1979) ラージカマル出版社専務, 後に, ラーダークリシュン出版社を設立。ラーケーシュを始めとする多くの作家たちを育てた。
- 14) *Ākhiri chaṭṭān tak*, Āgrā, Pragati Prakāśan, 1953 ; Dillī, Rājkamal Prakāśan, 1961 ; Vārāṇasī, Bhārtiy Gyānpīṭh, 1968, pp.103-4.
- 15) 'Interview with Mohan Rakesh', *Anthology Mohan Rakesh*, ed. by Carlo Cappola, Radha Krishna, 1974, p.15 (以下 *AMR* と略す)。
- 16) 'Chimṭiyorū ki pañktiyāṁ', *Parives*, Vārāṇasī Bhārtiy Gyānpīṭh, 1967, pp.3-4 (以下 *PAV* と略す)。
- 17) 「22の年で青年は老人になってしまった」(*PAV* : 22)。
- 18) 'Gardis ke din' *Sarika* (Feb., 1973), pp.22-23.
- 19) この時期の文学動向については, 田中敏雄「ヒンディー文学史における文学団体『バリマル』」『印仏研』第22巻第2号, 1974.
- 20) 田中敏雄「インド・パーキスターン分離独立期のヒンディー文学——ビージュム・サーハニーの小説『暗黒』を中心として」『印仏研』第26巻第2号, 1978 ; 「インド・パーキスターン分離独立期のヒンディー文学——ラーヒー・マースーム・ラザーの場合——」『印仏研』第27巻第2号, 1979 ; 謝 秀麗編訳 クリシヤンチャンドル, 『ベッシャーワル急行』, 東京 めこん 1986.
- 21) 「分離独立の前日……放火, 流血, 号泣——こうした背景で人々は人の生というものを初めて見たのであった。目に映るものといえば, 焦げ, 燃えさかり, 煙っている事実。ことばの上でこそ知っていたが, この目で見ることはこれまでになかった……分離独立の被害を被らなかつたもの, 屍体の山や全裸の女たちの行列を見なかつたもの, 自分の家に自分の手でどのように火を放ち, 自分の子供たちを自分の手でどのように殺すかという問題に直面しなかつたものですら, この状況の変動に無関係ではありえなくなつた……日常の営みは変り, 価値体系は変り, 人間関係は変つた」('Imārtēn tūṭne par', *Bakalam khud*, Dillī, Rājpal, 1974, p.93.
- 22) 「頑迷な進歩主義派から反動といわれ芸術至上主義派からは隠れコムニストと批評されている」(*AMR* : 17), と語り, 「私が思うには, この国はアメリカのイデオロジストたちとソ連のイデオロジストたちの間のチェスの盤であるようだ」(*AMR* : 25), と感想を洩らしている。
- 23) *Āsarh ka ek din*, Dillī, Rājpal, 1958.
- 24) *Amḍhere band kamre*, Dillī, Rājkamal Prakāśan, 1961.
- 25) Anitā Rākeś, *Chand satrēn aur*, Dillī, Rādhakṛṣṇ Prakāśan, 1975, p.75.

<キーワード> ヒンディー文学, モーハン・ラーケーシュ, 児童文学

(東京外国語大学教授)